



第15回日本獣医内科学アカデミー学術大会

健診を活用!

企業主催プログラム

内分泌疾患のUp to date

日時

2019年2月16日(土) 14:15~15:00

会場

第2会場 (パシフィコ横浜 会議センター 5F 502)

演者

左向 敏紀 先生

日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学科
獣医保健看護学臨床部門・教授

■ 富士フィルムグループは以下のセミナーに協賛しています。

2月16日(土)9:00~10:45 第12会場

<日本獣医臨床病理学会>
獣医学領域における臨床検査の
標準化・共用化(シンポジウム)
根尾 櫻子[麻布大学]・米澤 智洋[東京大学]

2月17日(日)15:45~17:30 第1会場

<JCVM & AiCVIM合同シンポジウム>
~内科医が斬る血管肉腫と血液凝固異常~
血管肉腫の治療アプローチ
小林 哲也 [日本小動物がんセンター]・奥田 優 [山口大学]・
上地 正実 [JASMINEどうぶつ循環器病センター]

2月17日(日)15:45~17:30 第9会場

一般内科で困った症例
~こんな主訴や併発疾患はどうするべきか~
[多飲多尿]
米澤 智洋[東京大学]

演題

健診を活用！内分泌疾患のUp to date

日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学科 獣医保健看護学臨床部門・教授

左向 敏紀 先生

人と同じように、健康診断(健診)の必要性がオーナーに理解され、特に高齢の動物たちには実施されるようになってきている。健診を実施するにあたり、以下のようなことを心得ておくことが大切である。

- 1) 定期的を受診をしてもらう理解を得る。
- 2) 健常参考値と比較するのではなく、個体情報を管理し、経年変化で健康状態、病勢を判断する。
また、そのためには院内データと受注検査のデータ共用化が必要である。
- 3) 異常値だけの判断ではなく、微妙な変化、グレーゾーンのデータを見逃さない。
- 4) 二次検査、精密検査への提案を準備しておく。

今回は、健診を活用し内分泌疾患を拾い上げる方法およびモニタリングについて解説を行う。

糖尿病

犬での診断基準を血糖値:126mg/dL、糖化アルブミン(GA):20%、グレーゾーン:GA15%を提案したい。より軽度なもの、グレーゾーンへの対応が必要と考えられる。犬のグレーゾーンと提案した症例に対して、早期のインスリン治療を行うことで糖尿病への進行が遅いことが報告されている。また、猫のグレーゾーンに対しての減量、併発症の制御は、GAの低下すなわち健常領域への回復が見られる。

猫の甲状腺機能亢進症

猫の高血糖、高GAの中には甲状腺機能亢進症の症例が含まれている。富士フィルムモノリス社における8歳以上の健診データでは、15.2%で認められている。現在では典型的甲状腺機能亢進症だけでなく、食欲低下や活動性の低い症例も発見されるようになっており、見逃し・見落としをしないようにする必要がある。

犬の甲状腺機能低下症および副腎皮質機能亢進症

高コレステロール血症and/or ALPの上昇を示すものとしては、犬の副腎皮質機能亢進症および甲状腺機能低下症がある。健診データではT4の異常値は、22%に認められ、また、その34%にTSHの異常を認める。T4値は、様々な条件により影響するため、その解釈には状態を併せて判断する。TSHは甲状腺機能を最も鋭敏に反映するマーカーであり、T4製剤での治療の判断、補充量の確認として重要である。副腎皮質機能亢進症では、近年、軽度の症例が多く発見され、その対応が重要である。臨床症状の消失、相対性副腎不全を起こさないこと、下垂体腫大のリスクを最小限にすることが目標となる。